

寺田寅彦

春六題



春
六
題

曆の上の季節はいつでも天文学者の計画したとおりに進行して行く。これは地球から見た時に太陽が天球のどこに來ているかという事を意味するだけの事であるから、太陽系に何か大きな質量の変化が起こるか、重力の方則が変わらない限り、予定のとおり進行してゆくはずである。

近ごろ、アインシュタインの研究によってニュートン

の力学が根底から打ちこわされた、というような話が世界じゅうで持てはやされている。これがこういう場合にお定まりであるようにいろいろに誤解され訛伝かでんされている。今にも太陽系の平衡が破れでもするように、またりんごが地面から天上に向かって落下する事にでもなるように考える人もありそうである。そしてそれが近代人の伝統破壊を喜ぶ一種の心理に適合するため、見当違いに痛快がられているようである。しかし相対原理が一般化されて重力に関する学者の考えが一変しても、りんごはやはり下へ落ち、彼岸ひがんの中日ちゆうにちには太陽が春分点に来

る。これだけは确实である。力やエネルギーの概念がどうなつたところで、建築や土木工事の設計書に変更を要するような心配はない。

アインシュタインおよびミンコフスキーの理論のすぐれた点と貴重なゆえんはそんな安直な事ではないらしい。時と空間に関する吾人の狭いとらわれたごまかしの考えを改造し、過去未来を通ずる大千世界の万象を四元の座標軸の内に整然と排列し刻み込んだ事ではなければならない。夢幻的な間に合わせの仮象を放逐して永遠な実在の中核を把握はあくしたと思われる事ではなければならない。

複雑な因果の網目を枠わくに張って掌上に指摘しうるものとした事でなければならぬ。

この新しい理論を完全に理解する事はそう容易な事ではないだろう。アインシュタインが自分の今度書くものを理解する人は世界じゅうに一ダースとはあるまいと言ったそうである。この言葉がまた例によって見当違いに誤解されて、坊間に持てはやされている。そして彼の理論の上に輝く何かしら神秘的の光環のようなものを想像している人もあるらしい。

特別な数学的素養のない人でも、この理論の根底に横

たわる認識論上の立場の優越を認める事はそう困難とは思われぬ。かえってむしろ悪く頭のかたまつたわれわれ専門学者のほうが始末が悪いかもしれぬ。この場合でも心の貧しき者は幸いである。

一般化された相対論はとにかくとして、等速運動に関するいわゆる特別論などはあまりにわかりきつた事であるためにわかりにくいと言われうるかもしれない。それはガリレー以来、力学が始まってこのかただれも考えつかなかつたほどわかりきつた事であつたのである。ここでアインシュタインが出て来てコロンバスの卵の殻からをつ

ぶしてデスクの上に立てた。

だれにでもわかるものでなければそれは科学ではない
だろう。

二

暦の上の春と、気候の春とはある意味では没交渉である。編暦をつかさどる人々は、たとえば東京における三月の平均温度が摂氏何度であるかを知らなくても職務上少しもさしつかえはない。北半球の春は南半球の秋であ

る事だけを考えてもそれはわかるだろう。

春という言葉が正当な意味をもつのは、地球上でも温帯の一部に限られている。これもだれも知ってはいるが、リアライズしていないのは事実である。

しかしたとえば東京なら東京という定まった土地では、一年じゅうの気候の変化にはおのずからきまった平均の径路がある。それが週期的ないし非週期的の異同の波によって歳々の不同を示す。

この平均温度というものが往々誤解されるものである。どうかするとその月にその温度の日が最も多いとい

う意見に思いちがえられるのである。しかし実際は月の内でその月の平均温度を示していた時間はきわめてまれである。

それと事がらは別だが、いわゆる輿論よろんとか衆議の結果というようなものが実際に多数の意見を代表するかどうか疑わしい場合がはなはだ多いように思う。それから、また志士や学者が言っているような「民衆」というような人間は捜してみると存外容易に見つかからない。飢えに泣いているはずの細民がどうかすると初鰹魚はつがっおを食って太平楽を並べていたり、縁日で盆栽をひやかしている。

これも別の事であるが流行あるいは最新流行という衣装や粧飾品はむしろきわめて少数の人しか着けていない事を意味する。これも考えてみると妙な事である。新しい思想や学説でも、それが多少広く世間に行き渡るころにはもう「流行」はしない事になる。

三

春が来ると自然の生物界が急ににぎやかになる。いろいろの花が咲いたりいろいろの虫の卵がふ孵化かする。気候

学者はこういう現象の起こった時日を歳々に記録している。そのような記録は農業その他に参考になる。

たとえばある庭のある桜の開花する日を調べてみると、もちろん特別な年もあるが大概はある四五日ぐらいの範囲内にあるのが通例である。これはなんでもないよ
うでずいぶん不思議な事である。開花当時の気温を調べてみても必ずしも一定していない。無論その間ぎわの数日の気温の高低はかなりの影響をもつには相違ないが、それにしてもこの現象を決定する因子はその瞬間の気象要素のみではなくて、遠くさかのぼれば長い冬の間から

初春へかけて、一見活動の中止しているように見える植物の内部に行なわれていた変化の積算したものが発現するものと考えられる。

そこへ行くと人間などはだらしのないものである。仕事が多忙しかったり、つい病気したりしていると、いつのまにか柳が芽を吹いたり、桜のつぼみのふくらむのを知らないでいて、急に気がついて驚く事がある。

うっかりしている間に学年試験が目の前に来ていたり、借金の返済期限がさし迫っていたりする。

眠っているような植物の細胞の内部に、ひそかにしか

し確実に進行している春の準備を考えるとなんだか恐ろしいような気もする。

四

植物が生物である事はだれでも知っている。しかしそれが「いきもの」である事は通例だれでも忘れてい

ある日私は活動写真で、菊の生長の状況を見せられた事がある。まず映画に現われたのは一つの小さな植木鉢うえきばちであった。そのまん中の土が妙に動くと思っていると、

すうと二葉が出て来た。それが見るまに大きくなり、その中心から新しい芽が泉のわくようにわき上がり延び上がった。延びるにしたがって茎の周囲に簇生ぞくせいした葉は上下左右に奇妙な運動をしている。それはあたかも自意識のある動物が、われわれには不可知なある感情を表わすためにもがいているようにも思われ、あるいはまた充実した生命の歓喜におどっているようにも思われた。やがて茎の頂上にむくむくと一つの団塊が盛り上がったと思ふとまたたくまにその頭がばらばらに破れて数十の花弁が花火のように放散した。そして絶大な努力を仕遂げて

あえいででもいるように波打っていた。そこで惜しいところ
で映画はふっと消滅してしまった。

私はなんだか恐ろしいものを見たような気がした。つま
らない草花がみんな「いきもの」だという事をこれほ
ど明白に見せつけられたのは初めてであった。

日常見慣れた現象をただ時間の尺度を変えて見せられ
ただけの事である。時の長短という事はもちろん相対的
な意味しかない。蜉蝣かげろうの生涯しようがいも永劫えいごうであり国民の歴史
も刹那せつなの現象であるとすれば、どうして私はこの活動映
画からこんなに強い衝動を感じたのだらう。

われわれがもっている生理的の「時」の尺度は、その実は物の変化の「速度」の尺度である。万象が停止すれば時の経過は無意味である。「時」が問題になるところにはそこに変化が問題になる四元世界の一つの軸としてのみ時間は存在する。

ところがこの生理的の速度計はきわめて感じの悪いものである。ある度以下の速度で行なわれる変化は変化として認める事ができない。これはまた吾人ごじんが個々の印象を把持はしじする記憶の能力の薄弱なためとも言われよう。

忘却という事がなかったら記憶という事は成り立たな

いと心理学者は言う。忘却というものがなかつたら生きていられないと詩人は叫ぶ。

もし記憶の衰退率がどうにかなって、時の尺度が狂つたために植物の生長や運動が私の見た活動写真のように見えだしたらどうであろう。春先の植物界はどんなに恐ろしく物狂わしいものであるろう。考えただけでも気が違ひそうである。「青い鳥」の森の場面ぐらいの事ではあるまい。

五

近年急に年を取ったせいも毎年春の来るのが待ち遠しくなった。何よりも気温の高くなるのが、ありがたいのである。しかしいったいには年じゅうの時候のうちでは春はあまり自分の性に合わないほうである。なぜかと言えば第一胃が悪くなる、頭が重くなる。こういう点で同様な人はずいぶん多いらしい。それよりもいちばんいやな事は春が来るとこの自分が「悪人」になるからである。冬の間はからだだじゅうの乏しい血液がからだの内部の

ほうへ集合しているような気がする。それで手足の指などは自分のからだの一部とは思われないように冷え凍えてこちこちしている代わりに頭の中などはいいかげんにあたたかいものがよい程度に充実しているような気がしている。ところが桜が咲く時分になるとこの血液がからだの外部と末梢まつしようのほうへ出払ってしまったて、急に頭の中が萎縮いしゆくしてしまうような気がする。実際脳の灰白質を養う血管の中の圧力がどれだけ減るのかあるいは増すのかわからないが、ともかくもそんな気がする。そうしてなんとなく空虚と倦怠けんたいを感じると同時に妙な精神の不

安が頭をもたげて来る。なんだかしなくてはならない要件を打ち捨ててもあるような心持ちが始終につきまわっている。それが少しひどくなると、自分が何かしらもっと積極的な悪事を犯していて、今にもその応報を受けるべき時節が到来しそうな心持ちになる。これがもう一歩進むと立派な精神病になるのだが幸いにそこまではならない。そうしてこういう時はちよつと風呂ふろにでもはいつて来ると全く生まれ変わったように常態に復する。

このような変化がどうして起こるかはわからないが、

いちばん直接な原因はやはり血液の循環の模様が変わつたために脳の物質にどうにか反応する点にあると素人考しろうとえに考えている。そのどうにかが一番の問題である。

物質と生命の間に橋のかかるのはまだいつの事かわからない。生物学者や遺伝学者は生命を切り砕いて細胞の中へ追い込んだ。そしてさらにその中に踏み込んで染色体の内部に親と子の生命の連鎖をつかもうとして骨を折っている。物理学者や化学者は物質を磨り砕すいて原子の内部に運転する電子の系統を探っている。そうして同一物質の原子の中にある或ある「個性」の胚子はいしを認めんとし

ているものもある。化学的の分析と合成は次第に精微を
きわめて驚くべき複雑な分子や膠質粒こうしつりゆうが試験管の中で
自由にされている。最も複雑な分子と細胞内の微粒との
距離ははなはだ近そうに見える。しかしその距離は全く
吾人ごじん現在の知識で想像し得られないものである。山の両
側から掘って行くトンネルがだんだん互いに近づいて最
後のつるはしの一撃でぽこりと相通ずるような日がいつ
来るか全く見当がつかない。あるいはそういう日は来な
いかもしれない。しかし科学者の多くはそれを目あてに
不休の努力を続けている。もしそれが成効して生命の物

理的説明がついたらどうであろう。

科学というものを知らずに毛ぎらいする人はそういう日をのろうかもしれない。しかし生命の不思議がほんとうに味わわれるのはその日からであろう。生命の物理的説明とは生命を抹殺まつさつする事ではなくて、逆に「物質の中に瀰漫びまんする生命」を発見する事でなければならぬ。

物質と生命をただそのままに祭壇の上に並べ飾って賛美するのもいいかもしれない。それはちょうど人生の表層に浮き上がった現象をそのままに遠くからながめて甘く美しいロマンスに酔おうとするようなものである。

これから先の多くの人間がそれに満足ができるものであろうか。

私は生命の物質的説明という事からほんとうの宗教もほんとうの芸術も生まれて来なければならぬような気がする。ほんとうの神秘を見つけるにはあらゆるにせもの贗物を破棄しなくてはならないという気がする。

六

日本の春は太平洋から来る。

ある日二階の縁側に立って南から西の空に浮かぶ雲をながめていた。上層の風は西から東へ流れているらしく、それが地形の影響を受けて上方に吹きあがる所には雲ができてそこに固定しへばりついているらしかった。磁石とコンパスでこれらの雲のおおよその方角と高度を測つて、そして雲の高さを仮定して算出したその位置を地図の上に当たってみると、西は甲武信岳こぶしだけから富士箱根はこねや伊豆いずの連山の上にかかった雲を一つ一つ指摘する事ができた。箱根の峠を越した後再び丹沢山たんざわやま大山の影響で吹き上がる風はねずみ色の厚みのある雲をかもしてそれ

が旗のように斜めになびいていた。南のほうには相模半島から房総半島の山々の影響もそれと認められるように思った。

高層の風が空中に描き出した関東の地形図を裏から見上げるのは不思議な見物みものであった。その雲の国に徂徠そらいする天人の生活を夢想しながら、なおはるかな南の地平線をながめた時に私の目は予想しなかったある物にぶつかった。

それははるかなはるかな太平洋の上におおっている積雲の堤であった。典型的なもくもくと盛り上がったまる

い頭を並べてすきまもなく並び立っていた。都会の上
に広がる濁った空気を透して見るのでそれが妙な赤茶けた
あたたかい色をしていた。それはもうどうしても冬の雲
ではなくて、春から夏の空を飾るべきものであった。

庭の日かげはまだ霜柱に閉じられて、隣の栗くりの木こ
ずえには灰色の寒い風が揺れているのに南の沖のかなた
からはもう桃色の春の雲がこっそり頭を出してのぞいて
いるのであった。

こんな事を始めて気づいて驚いている私の鼻の先に突
き出た楓かえでの小枝の一つ一つの先端には、ルビーやガー

ネットのように輝く新芽がもうだいぶ芽らしい形をして
ふくらんでいた。

（大正十年四月、新文学）

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館